



みずみどり

2007年3月15日

第59号

発行：いたばし水と緑の会 事務局

年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会

<http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/>E-mail : mizumidori@nifty.com

〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124

シュロについて



シュロの木は敷地の広い家では観賞用に、庭に植えてあるのを見るが、街の公園（遊園地）ではあまりお目にかからない。しかし、赤塚公園の崖線やその付近の自然林と、その周りにはシュロが沢山生えている。

昔の農家などでは大抵庭にシュロが植えてあり、腐り難くて強靱な繊維質の樹皮を、縄（シュロ縄）にして垣根や庭木の結束用の紐に使用してきた。また、シュロの皮で作った蓑（マント状）も子供のころ見たことがある。シュロの幹は家の柱や手すりなどの建築資材として、また、お寺の撞木にも使われてきたそう。葉柄を数十センチ付けて葉を採り、葉の部分を15～20センチ位に切り、葉を裂いてから先端近くと中間の2箇所を、たこ糸などの丈夫な糸で簾編みした八エたたきが良く使われ、自分でも作ったことがある。シュロ（樹皮）を針金に編



込んだ玄関マットが都会で良く使われていた。プラスチック全盛の今は見なくなったが、シュロは生活の道具や材料としてよく利用された必需品でもあった。

シュロはヤシ科の雌雄異株の単子葉植物で、枝分かれしない木である。直径が15センチ位になると太さは止まり、背丈だけが伸びて行く木である。成木になると黄色いカズノコ状の花穂を上部の葉の間から横に複数本出し、熟すと灰白色の硬い実を房状に沢山付ける。果肉がそんなにあるとは思えないが、これをヒヨドリなどの野鳥が食べ、広い範囲に亘って種をばらまく(排泄する)。適度な日照と水はけ、それに通風のよい林縁部ではことにたくさんのシュロが見ら

れるが、薄日の差し込むような林なら、やや大きな葉になり幹もやや徒長して育つために、林の中や縁などヒヨドリなどが飛び回るところには、実生のシュロが沢山生えることになる。

シュロは中国南部から南九州辺りに、自生していると言われており、その後人間や野鳥によって本州北端まで広まったようである。いわゆるシュロは葉が大きくて、成木では葉が途中で折れて垂れ下がり易いが、後から葉が少し小ぶりで垂れにくい種類が入ってきた。これをトウジュロと言って区別しているが、その後両者の交雑種もできているようだ。最近では、庭に植えるには葉の小さい方が好まれるので、トウジュロを多く見かけるようだ。

ヤシ科植物には大きく分けてシュロ類、トウ類とヤシ類の3種類がある。シュロ類は葉が扇状に広がり、トウ類は幹が蔓状に長く伸び、ヤシ類は羽状複葉の長い葉になる。

シュロの仲間には、シュロチクとカンノンチクもあり、どちらも小型で古くから観葉植物として良く知られている。耐寒性がやや劣るので、冬は屋内に取り入れたほうが良い植物である。シュロチクは幹がやや細くて、樹高が大きく(3m位に)なり葉もやや繊細で、カンノンチクの幹はやや太くて樹高は低い(1m位)ようだ。

トウ(籐)は熱帯性の植物であり、籐細工として椅子やテーブルなどの家具に使われている。昔は乳母車といえどトウで造ったものが専らだったが、最近ではめったにお目にかかれなくなった。

ヤシ類は大きなものから小さなものまでたくさんの種類があるが、国内では関東以南で植えられている、フェニックスがある。フェニックスとはフェニックス属の総称で、この仲間にはカナリーヤシ、ナツメヤシ、シンノウヤシなどがあり、国内の海岸沿い道路で見られる街路樹はカナリーヤシで、マイナス10度C位までの耐寒性があるらしい。その他、屋内で観賞する観葉植物としてのテーブルヤシ(ココヤシやチャメヤシなど)が良く見られる。

以上、シュロに関連して少し書いてみたが、在来の自然樹林を駆逐している、と言われる竹

(孟宗竹)ほど樹木に害を及ぼさないであろうが、樹林の中の中低木としてシュロが大きな比率を占めていくように思われ、林の管理に当たって注目する必要がある(猪鼻 昭二)。

赤塚梅まつり 今年も参加できてよかった

人気のノコギリ体験、展示ではクワガタとモグラの剥製が注目

3月3日、4日は赤塚梅まつり。今年もトンボ池の前の当会のコーナーでは、赤塚公園の自然の紹介と、竹や剪定枝を使ったノコギリ体験と工作でにぎわいました。梅まつりというと例年は寒さの中での行事だが、今年は異常気象といわれる暖かさで、人出も多く、シートを敷いてゆっくり飲んだり食べたりと、お客さん達も十分楽しんでいました。

展示はパネル展示、釣巻さんの昆虫標本とモグラの剥製。今年は昆虫の標本をのぞき込む人がすごく多かった。なぜか？今年の標本にはクワガタ、カブトムシ、タマムシと目立つ昆虫が入っていました。やはり有名昆虫は人を引きつけます。そして一様に「へえクワガタがいるのですか」と驚かれる。

モグラは2001年10月に赤塚城址で見つけた死骸。会で18,000円也の大出費をして剥製にし、毎年展示して多くの方に紹介してきました。これまではモグラが傷むからとフィルムをかけていたのですが、今回はそれはずして展示。直に見る印象は強く、反応は大きかった。次々と撫でられたり握られたり、30分もしないうちに毛並みが乱れ、あれっ変になってきたみたい、と、あわてて「モグラ 本物です。毛が抜ける

るので触らないでください」と書いておさわり禁止に。「赤塚ため池周辺を昔の自然に復元する可能性について考える」「カエルの住む環境」「いたばし水と緑の会の活動紹介」の地味なパネルも多くの方に覚えてもらえました。

展示の前では立ち話、昔の自然の思い出や残したい自然と話が弾む。「そう言えば三園に住み始めた頃、庭にモグラ



塚がいくつもあったけど最近はないわね」。モグラは土の中のミミズなどの生き物を食べる動物なので、今では赤塚城址くらいしかモグラの住めるよい環境はないらしい。目が退化していますと説明したら、「何も見えなくて何が楽しくて生きているのでしょうか」と言った人や、「モグラって何の役に立つのですか」と質問した人もいて、受け止め方は人さまざまです。みなさんならどう答えますか。

池にはカエルの卵、カエルも姿を見せた。カエルや卵を見せてあげながら、毎年卵やおタマジックが子ども達（子供のためにもっていく大人？）にごっそり取られてしまう現状を思うと、どうしたらよいのか考えてしまう。とにかくカエルになるまでそっとしてほしいと願うばかり。

ノコギリ体験コーナーでは、子ども達はノコギリを使って直径7cm程の枝を輪切りにし、マジックで好きな絵を描く、それを私たちが金具をつけリボンを通してあげてペンダントのできあがり。ノコギリを使えない小さな子供も多く、ノコギリ担当は途中まで切ってあげたり、手を添えてほとんど切ってあげたりのサービス。用意した金具の数からみて作ったペンダントは300個近かった。



一方、竹の工作では、井上さん力作の花入れの見本がいくつも並ぶ。見本を見るとがぜん創作意欲が湧く（欲しくなる）。「お手伝いするけれど自分で作るのが原則ですよ」

と言っても、「おじさん、お願い」と女性に頼まれて会員がせっせと加工することになり、こちらも超忙しい。もちろん見本の作り方を聞く人、自分でやる人もいる。ぐい飲みを作り、ヤスリをかけて仕上げた男性もいた。参加費は子供は無料、大人は200円。2日間で9300円の収入。支出はペンダント用金具とリボン、マジックなどで、毎年少し黒字になる。後に残るのは、赤塚公園の自然を大切にしたいという私たちの活動をPRできた、みんなに喜んでもらえたという満足感。病氣療養中の大西さんが奥様と来られておまんじゅうの差し入れ。会えてうれしかった。私たちが1999年3月(平成10年度)の梅まつりに初めて参加してから早いものでもう9回目になるが、大西さんははじめてから工作コーナーの頼りになるリーダー、早くよくなって来年は一緒に参加したいですね(坂本 郁子)。

ソウシチョウ(相思鳥)について

昨年あたりから、赤塚城址付近でソウシチョウを見た、と言う話を聞いていたが、今年の2月17日の観察会当日、赤塚城址広場の北西側の林で、朽ちかけた倒木を突っついてソウシチョウの群れに出遭った。数メートルの距離から見る事が出来、体形や羽の色でソウシチョウに間違いがないことが確認できた。また、3月1日には、乗蓮寺うらのとんぼ池にてツガイと思われる2羽に出逢った。



どちらの時もごく自然に飛び交っており、この辺りに棲み付いていることが窺える。2回目の時はシジュウカラの群れと一緒に、ドウダンツツジやウツギなどの低木を忙しく移動していた。人間をそんなに警戒していないが、数メートル以内には近寄れず、デジカメでの3倍ズームでは、鳥を大きく撮影することは出来なかった。

鳥類図鑑にはスズメ目ヒタキ科・チメドリ亜科で、中国南部からインドに亘って棲んでいる、(日本では)飼鳥になっている。体長15cm、全体がくすんだ緑色で、嘴と風きり羽が赤や黄色など多色、喉が黄色い小鳥だ。サイトで調べると、相当昔から飼われており、すでに、1931年には神戸近辺の屋外で見かけたらしい。1980年には関東以南(九州まで)の野外で繁殖が見られたそうだ。標高1000m位までの竹林や藪で繁殖して、冬は平地に降りて過ごすといわれている。最近の筑波山では、最も多い野鳥がこのソウシチョウだ、と言われている。我々のいる板橋地区は、関東平野の真中なので、鳥の数が殖えるまでは、侵出して来なかったものと思われる。

色は南国の鳥らしく非常にきれいだが、鳴き声は日本人には馴染まないところから、観賞に飽きた人が放したり、小鳥店でも持て余して逃がしたのでは、とされている。

ソウシチョウは棲むところが藪で、ウグイスやアオジ、コマドリ、オオルリなどと同じであり、気性が強いので在来種の棲みかを占拠することが考えられるため、特定外来生物に指定(魚のブラックバスなどと同じ)されており、許可無しでは飼えないことになっている。

赤塚城址付近では野鳥が沢山見られるので、カメラをすえつけて撮影する人が多くいて、話を聞いたり撮影した写真を(見せて)いただくこともある。これまでに直接見たり、写真を見せていただいたり、姿は見ないが鳴き声から判定した野鳥は次のようになる。

アオジ、ウグイス、オナガ、カケス、カラス、カワセミ、カワラヒワ、キジバト、コガモ、コゲラ、コサギ、シジュウカラ、シメ、ジョウビタキ、シロハラ、スズメ、ツグミ、ツバメ、ツミ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ホオジロ、メジロ、ムクドリ、モズ、ヤマガラ、ワカケホンセイインコ・・・。



写真：林 寿郎さん提供

ワカケホンセイインコも、飼い鳥が逃げ出して野生化したものだが、数年前からけたたましい声で鳴きながら、群れて飛んでいくのをよく見る。この他にもギンパラとかベニスズメなども野生化している、と聞いたことがある。在来の鳥では、シジュウカラ、メジロ、ヒヨドリなどは殖えたが、モズは減った。ツバメも少なくなったことを痛感している(猪鼻 昭二)。

観察記録 いたばし水と緑の会観察会

07.1.20「ミノムシを探そう」

肝心のミノムシはあまり見あたらず、物置やコンクリートの擬木についていたネグロミノガだけ。去年はかなり木からぶら下がっていたのに、今年は木にぶら下がっているミノムシは見あたらなかった。

07.2.17「樹の幹の見分け方の幹にいる虫」

イヌシデの梢も賑やかに芽が動きはじめ、マユミには緑の新芽。野鳥では、シメ、コゲラ、ソウシチョウ(特定外来種に指定されている)、ヒキガエルが4,5匹。猪鼻さんによると14日には来ていたとか。幹についている虫を探す。スダジイの幹にとけ込むように止まっているシロフユエダシャクの雄(写真左上)、次に城址に登る階段の擬木柵にじっと止まっているのはクロテンフユシャクの雌(写真右上)、フユシャクの雌には羽が



なく、蛾とはとても思えない姿。釣巻さんの説明によるとフユシャクは冬の雑木林をふわふわ飛んでいる蛾で、雌は羽がない。冬に赤塚トンボ池の水面によく浮いている蛾の死骸はフユシャク（クロテンフユシャクの雄）。フユシャクの仲間は、餌のない（だけど天敵の少ない）冬に成虫になり、その後は飲まず食わずですごします。雌は夜になると歩き回り、都合の良いところを見つけるとじっとしています。雄は雌の出すフェロモンをたよりに飛び回って雌を探し、交尾して産卵すると一生を終えるそうです。冬、人目につかない林で生きているこんなフユシャクの姿がありました。

赤塚トンボ池の観察ノートから

07.12.25 晴れ トンボ池中程のオギの根元に若いゴイサギがじっとしている。足は水中で見えない。目の回りにオレンジ色の輪。くちばしの付け根は濃い緑。その上方から伸びて垂れ下がっている枝にアオジが3, 4羽くる。

07.1.3 晴れ トンボ池の上に小さく尾の長いやさしい声ミミ、ミミ、エナガの群れだ。7, 8羽が鳴き交わし、枝移り、コゲラの声も近くに来た。

赤塚城址の桜にウソが6羽いた。フィーフィーと消え入るような声。盛んに桜の芽らしきを身を乗り出すようにして食べてはそのカスを落とす。雄は頬やのどのあたりが赤っぽい。ウソはここで初めて。カケスも4羽。シメは1羽地面に。

印刷屋より読者の皆様へ

会員の皆様、印刷のご注文毎度有難うございます。本誌の用紙が色付きの紙で、毎号異なるのは贅沢ではないかという疑問をお持ちの方もいらっしゃるかと思います。紙の取引単位には端数、包(枚数は用紙により異なる)、連(全紙で千枚)の3種類があり、それぞれ単価が異なります。1包が250枚の用紙は250×@28.8=7,200円になりますが、同じ用紙を200枚買うと端数単価になり200×@48=9,600円になってしまいます。少ない量を買ったのに支払う金額は増えてしまうのです。余った紙は無駄になるが、高く買っていては商売になりません。本誌の用紙は実はこの余り紙(再生紙率.75%)なのです。資源の有効利用のためと当社の経理のため余り紙活用にご協力頂いております。このような訳で、毎号違う色になってしまう事にご理解をお願いします。

活動のお知らせ

運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。

4月運営委員会：4月6日(金) 18:30~20:30

場所：前野地域センター洋室(エコポリ2階)

5月運営委員会：5月2日(水) 18:30~20:30

場所：エコポリスセンター環境学習室

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：5月18日(金) 18:00~ 場所：エコポリスセンター

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは瀬田まで(3969-7124)

会では赤塚や徳丸が原公園で私たちが作った自然の場所を中心に自然の変化を観察しています。またゴミ拾いや、ピオトープの改善等必要な修理等を行っています。観察会は原則として雨天も実施します。

4月の活動 赤塚城址周辺クリーンアップ

日時：4月21日(土) 10:00~11:30(雨天の場合は延期)

集合場所：赤塚トンボ池前(板橋美術館そば)

5月の活動 城址観察会「春の昆虫」

日時：5月19日(土) 10:00~12:00

集合場所：赤塚トンボ池前(板橋美術館そば)

持ってくるもの：あれば双眼鏡、虫眼鏡、図鑑

生き物のすめる環境整備

ミニトンボ池生け垣(壊されました)の補修と池の生き物の点検(3月) バッタ広場の木とアズマネザサの刈り取り(4月)を予定しています。

日時：3月31日(土) 10:00~11:30

4月28日(土) 10:00~11:30

集合場所：赤塚トンボ池

汚れてもよい服装で。雨天の場合は中止(連絡先：坂本090-4618-1295)

いたばし水と緑の会10周年総会

日時：4月21日(土) 13:30~

場所：赤塚5丁目集会所(赤塚大仏の近くです)

あなたも会員になってください(年会費2000円：振込先は表紙に記載)

いたばし水と緑の会の活動はすべて会員の会費によってまかなわれています。主な用途は、会報郵送料、印刷費、ピオトープ池維持管理のための資材費、コピー代などです。